



「相手がどう受け止めているのか」

本号では、本年度、岐阜市が行った「人権に関する作文」募集に応募していただいた作品の中から、私たちが学ぶべき考え方や行動などについて、すばらしいアドバイスとなる作品を紹介するとともに、応募作品の中から、秀作として選ばれた児童・生徒の皆さんを紹介します。

真の意味での平等とは

岐阜市立 岐北中学校 二年 高橋 彩華

自分は、わりと誰にでも同じように接することのできる人だと思っていた。友達はもちろん、苦手な人ともコミュニケーションをはかることができるし、祖母が身体しやうがい者であることもあり、体の不自由な方の介助もすすんでやることができるからだ。

しかし、私は本当に差別をしない人間なのか。ただ自分が誰にでも平等に接することができるといふことに優越感を覚えたくて、行動しているだけではないだろうか。ほかの誰かに、「認めてもらいたい」という思いが、心のどこかにあるのかもしれない。本当の意味での平等ということが、今の自分には理解できていないように思う。

一年生の人権の学習で、「しやうがいのある方と自分」について学んだ。授業の中で、私が一番自分を見つめ直したテーマは、「脳性マヒによる重度な身体しやうがいをもった方が、自分の働いているレストランに来店したら？」である。先生は、こう質問された。

「あなたが店員だったら、ほかのお客さんと同じように対応できますか。私は、「分からない」に手を挙げた。最初に話を聞いただけの時は、対応できる、しなくちゃいけないと思った。

でも、その脳性マヒの方の映像を見て、気持ちが揺らいだ。歩行器を使っているが、一歩進むのも困難そうな方で、そのうえ、何を話しているのか全く分からない。この人と会話をするのは、大変そうだ、面倒くさそうだと思った。

でも、これは見た目による私の勝手な判断だ。見た目で決めつけるのは

いけないけれど、どこかでそれをやってしまおう。

それでも私は、もし店員になったら、対応はするだろう。ほかのお客さんと全く同じ対応はできないし、面倒くさいと感じていると思うけれど、かわいそうな人に優しくしているという自負が、そうさせているだけなのだ。そう考えた時に、私は「分からない」という考えに達したのだと思う。

もう一つ、私には「差別」ということを考えさせられた経験がある。

お正月に、家族でショッピングモールに出かけた時のことだ。歩いていると、前から車いすに乗った男の子と、それをおす男性が歩いてきた。男の子に重度なしょうがいがあることは、一目で分かった。

すれ違った後ぐらいに、その車いすにかかっていたタオルが落ちた。男の子のよだれをふいていたものだった。持ち主の二人は、落としたことに気付いていなかったようだ。私は、とっさに拾って追いかけた。

「これ、落としましたよ。」

と言ってタオルを差し出すと、車いすをおしていたお父さんらしい男性が、

「ありがとう、ありがとう。」

と言って、何度も頭を下げた。笑顔で私を見送ってくれている。私も自然と笑顔になった。

「新年早々、いいことをしたな。」と、思った。

しかし、よくよく考えると、落とし物を拾うことはあたりまえのことである。持ち主が、しょうがいのある方だったなら、「いいこと」になるのか。私は、目の前に落とし物があっただけなのか、いいことがしたくて拾ったのか、自分でもよく分からなくなった。自分の中で、とっさに差別の心が生まれたのかもしれない。きっと今までにも、「いいこと」をしたという満足感の裏に、無意識で「差別」をしていたんだと思う。

今まで、祖母や車いすの方をはじめ、大変そうだなと思った人には、手助けをしてきた。

それは、きつと相手が手を必要としているだろう、喜んでくれるだろうと、私が勝手にそう考えていたからである。その思い込みが、時に「差別」だと相手に感じられ、不快な思いをさせてしまうのだということに、気付いていなかった。

私の何気ない言動が「平等」なのか「差別」なのかは、私がどういう気持ちでやっているのかではなく、相手はどう受け止めているのかだったのだ。本当に助けてほしいのか、黙って受け流してほしいのか、それを見極めるのは難しい。

相手の気持ちになっても、本当に望んでいることを考えられるようになれば、真の意味での「平等」に一步近づけることができるのだろう。

認められたい気持ち

「他の人に認められたい」この欲求は、誰にでもあります。認められないと自分の存在意義を見失うほど大切に、生来的な欲求です。ですから、それはあってよいものであるし、あるべきものでもあります。

しかし、この作品を書いた生徒は、そこを自省的に、とても鋭く見つめています。

「手を差し伸べる」行為が、本当に意味のあることなのか、あるいはそうではないのかは、まさに「相手がどう受け止めているか」に関わってきます。

では、「手を差し伸べられた側の気持ち」はどうなのでしょう。本当に「助かった」「ありがとう」と思うか、「今の人は、自分自身のために私に手を差し伸べたのだな」と思うかは、とても大切なポイントです。時として、自己満足に終わっている言動はないでしょうか。



どうすれば本当に相手に近づけるのか

では、どうすれば、今からしようとする言動が「Oか×か」を判断できるのでしょうか。

それは、「相手の立場になって考えられるかどうか」に尽きるのではないのでしょうか。

小・中学校の道徳の資料の中には、【あるおばあさんの孫のいたずらで、スーパーマーケットの段ボールが崩れたのをなおしていたのに、店の人に段ボールを崩した本人だと誤解されて叱られる小学生の主人公】の話や、【海外で、車いすの少年が、はまってしまった溝から出ようと必死にもがく様子を見て、すぐに助けようとするものの、周りの大人に制止され、応援だけするよう求められる大人の主人公】の話があります。どちらの資料においても、言動の基準とすべきは、「相手がどう受け止めているのか」ということです。

学び

いじめやパワハラの主たる加害者は「そんなつもりはなかった」「誤解だ」、虐待の場合「しつけのつもりだった」、そしてそれらの傍観的加害者たちからは、「知らなかった」「気づかなかった」等の言葉をよく聞きます。

しかし、これらの言葉は、自分がいかに「相手の立場に立つことができない」ということを言い表していることと同じように思われます。

この「相手の立場に立てない」理由は主に2つあり、1つは、相手が置かれている状況が、社会的にどのような位置であるのかという知識が十分でなかったり、偏見などによる間違った知識をもっていたりする「正しい理解」の不十分さ。もう1つは相手の立場になって考える・考えようとする経験・想像力の不十分さです。

しかし、これら2つとも、自ら学ぼうとしたり、トレーニングしようとしたりすれば身につくものです。これは、年齢には関わりません。何歳になっても学びは続くのです。



始めに紹介した作品以外も、とてもすぐれた作品です。本年度の秀作に選ばれた児童・生徒の皆さんとその作品を紹介します。

小学生の部				
賞	題名	校名	学年	氏名
最優秀	「知らなくてごめんなさい。」	常磐小学校	4年	名和 里佳子 さん
優秀	「おたがいさま」の心	則武小学校	6年	近藤 響希 さん
優秀	職業による差別	黒野小学校	6年	吉口 元康 さん
入選	一人でも守ってほしい	黒野小学校	4年	井波 詩央里 さん
入選	私のお姉ちゃん	則武小学校	6年	林 美乃鈴 さん
入選	「共に生きる」を勉強して	黒野小学校	6年	池田 心愛 さん
入選	六年間の宝物	黒野小学校	6年	玉木 彩賀 さん
入選	高齢者との関わりで学んだこと	早田小学校	6年	貝谷 憩 さん
佳作	立ち向かう勇氣	早田小学校	5年	松原 胡香茜 さん
佳作	「いじめ」	則武小学校	6年	高橋 奏光 さん
佳作	戦争についてや高齢者とのふれあい	早田小学校	6年	西垣 心結 さん
佳作	外国の子どもたち	早田小学校	6年	山本 伊織 さん
佳作	「ぼくの気持ち」「相手の気持ち」	城西小学校	6年	栗本 宗典 さん
中学生の部				
賞	題	校	学年	氏名
最優秀	真の意味での平等とは	岐北中学校	2年	高橋 彩華 さん
優秀	平和で差別のない社会へ	三輪中学校	1年	山内 咲葵 さん
優秀	私は「ハーフ」ではなく、『ダブル』だ	岐北中学校	3年	伊藤 侑真 さん
入選	『知ることが差別をなくす第一歩』	青山中学校	1年	名和 由佳子 さん
入選	読書を通して自分を見つめる	岐阜聳学校	2年	翠尾 朋奈 さん
入選	自立した生活を送るために	長森中学校	3年	長尾 彩花 さん
入選	すべての人が平等に	長森中学校	3年	平工 莉奈 さん
入選	私の曾祖母	岩野田中学校	3年	北川 実来 さん
入選	自分の視点、他者の視点	藍川東中学校	3年	池山 尚 さん
佳作	「心の病院」	岐阜盲学校	1年	飯沼 建太 さん
佳作	全ての人に嫌われる覚悟で	岐阜中央中学校	2年	高橋 美咲 さん
佳作	戦争	長森中学校	2年	伊藤 夕結 さん
佳作	悪口のない生活	長森中学校	2年	玉田 真依子 さん
佳作	平和の意味	三輪中学校	3年	小澤 亮 さん
佳作	いじめ	境川中学校	3年	可児 李音 さん